

写真展 村の記憶 松原 豊

■「村の記憶」について

今回の写真展は、三重県伊勢市の出版社・月兎舎が発行する「季刊誌 NAGI」に2006年6月から2007年12月の間に連載された「村の記憶」(モノクローム作品)の写真と、その後現在にいたるまで三重県内で撮影した写真群を展示。2006年に実施された平成の市町村大合併で、三重県内から「村」と呼ばれる行政区分が消滅したことを契機に、撮影を始める。出来る限り細部まで描写した写真を残したいとの思いから、4×5インチの大判カメラを使用し、一枚一枚時間をかけて撮影。現在はかつての9村(旧ヶ原村・旧大山田村・旧美里村・旧美杉村・旧御園村・旧勢和村・旧宮川村・旧大内山村・旧鶴殿村)だけでなく、三重県内各地の農山漁村に息づく「村」の面影を求め撮影を続けている。



平成18年度、行政改革による市町村合併で三重県から村が消えた。車社会になってこの方、町と村の生活にほとんど違いなどなくなっただけではあるが、それでも数世紀に渡って親しまれた呼称が、戸籍や地図から消滅するのは寂しい。村長、村人、村役場、村祭り、村芝居…。ムラという言葉の響きに、童話や童謡の場面を想い起こすのは私だけではあるまい。合理化という旗印のもとに、われわれは便利なものを次々と生み出し、使い捨て、その代わりに大切なものを亡くしてきたような気がする。松原豊は、その大切な何かを写真によって記憶に留めようとしたのだ。ひととき小柄な彼が、でかい4×5インチのカメラと三脚を担いで農漁村を駆け回る姿は、そのまま写真師の原風景であった。古き良き昭和が語りかける松原ワールドに、どっぷりと身をゆだねていただきたい。

(NAGI 発行人/吉川和之)



「その国の美徳を代表している庶民の中にこそ、その魅力は存在するのである。その魅力は、喜ばしい昔ながらの習慣、絵のようなあでやかな着物、仏壇や神棚、さらには美しく心温まる先祖崇拝を今なお守っている大衆の中にこそ、見出すことができる。」これはラフカディオ・ハーンの『日本の面影』の冒頭部分に出てくる文章だ。松原と一緒に仕事をしている私は、事務所の壁面に貼り出された村の姿を見るたびに、この言葉が浮かんでくる。「村の記憶」の写真群は数年前から現在に至る県内の田舎の姿を撮影したものなのだが、ハーンが綴った百数十年前の日本の片田舎の光景と重なるのは、たぶん私だけではないだろう。大きく引き伸ばされた松原の写真をじっと眺めると、過去と現在が交錯する感覚に陥ってくる。その理由を会場で見つけてほしい。

(office369番地/立岡茂)

2010年3月18日(木)~3月22日(祝)

三重県立美術館・県民ギャラリー

〒514-0007 三重県津市大谷町11 電話 059-227-2100

入場
無料

●開催時間 / 9:30~17:00

■主催・お問い合わせ先/写真集「村の記憶」制作事務所 (office369番地)

〒514-2113 三重県津市美里町三郷 369

事務所携帯 080-3598-5090

<http://www.hibicore.com/pg78.html>

■後援 / 津市 伊勢市 多気町 大台町

大紀町 紀宝町 東紀州観光まちづくり公社

NPO 法人 大杉谷自然学校 月兎舎 カラス編集室

尽力舎 かまどの会 Salsica

■協力 / 美里雑学大学



©2010 office369 番地

このフライヤーに掲載されている写真その他の内容を無断で複製・転載することは著作権法での例外を除き、禁じられています。